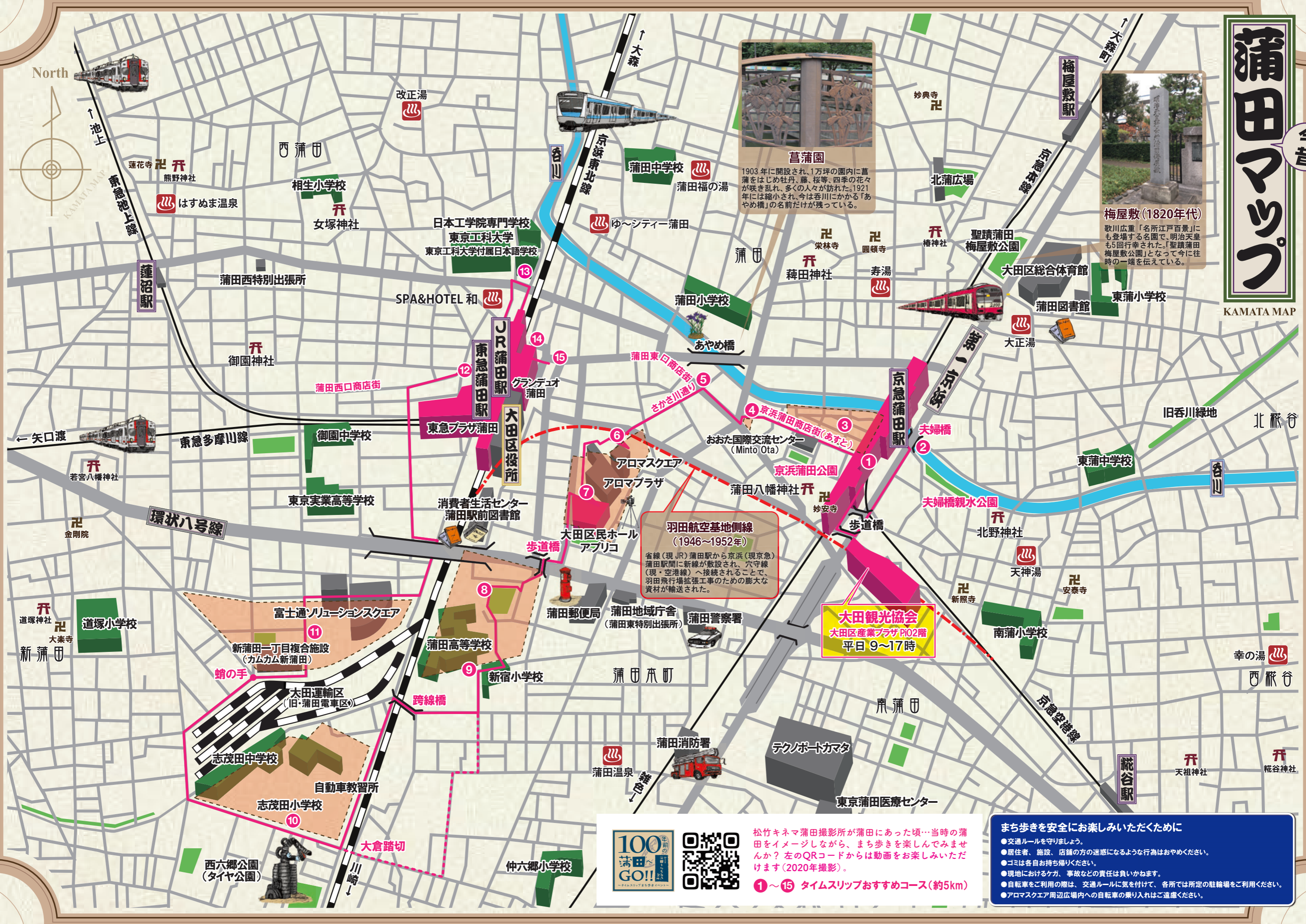


蒲田マムシマップ

今昔



菖蒲園
1903年に開設され、1万坪の園内に菖蒲をはじめ牡丹、藤、桜等、四季の花々が咲き乱れ、多くの人々が訪れた。1921年には縮小され、今は呑川にかかる「あやめ橋」の名前だけが残っている。



梅屋敷 (1820年代)
歌川広重「名所江戸百景」にも登場する名園で、明治天皇も5回行幸された。「聖蹟蒲田梅屋敷公園」となって今に往時の一端を伝えている。

羽田航空基地側線 (1946~1952年)
省線(現JR)蒲田駅から京浜(現京急)蒲田駅間に新線が敷設され、穴守線(現・空港線)へ接続されることで、羽田飛行場拡張工事のための膨大な資材が輸送された。

大田観光協会
大田区産業プラザPiO2階
平日 9~17時



松竹キネマ蒲田撮影所が蒲田にあった頃…当時の蒲田をイメージしながら、まち歩きを楽しんでみませんか？ 左のQRコードからは動画をお楽しみいただけます(2020年撮影)。

①~⑮ タイムスリップおすすめコース(約5km)

- まち歩きを安全にお楽しみいただくために**
- 交通ルールを守りましょう。
 - 居住者、施設、店舗の方の迷惑になるような行為はおやめください。
 - ゴミは各自お持ち帰りください。
 - 現地におけるケガ、事故などの責任は負いかねます。
 - 自転車をご利用の際は、交通ルールに気を付けて、各所では所定の駐輪場をご利用ください。
 - アロマスクエア周辺広場内への自転車の乗り入れはご遠慮ください。

KAMATA MAP

100年前の
蒲田まちなみ
案内

一般社団法人 大田観光協会
大田区南蒲田1-20-20
大田区産業プラザ2階
TEL03-3734-0202 FAX03-3734-0203
URL <http://www.o-2.jp>
令和8年3月 発行

大正9年(1920年)、今からおよそ100年前の蒲田に、新しい風が吹き寄せた。農村だった蒲田に鉄道が通り、耕地整理が入り、撮影所がで、まちは一変しました。数々の新しい工場もこの地を選び開設し、いつしか蒲田から流行が発信されるようになりました。

1 京濱蒲田驛

品川横濱間を連絡する京濱電鉄は、町内に蒲田、梅屋敷、出村の三停車場を有し、蒲田停車場より羽田に至る支線あり、春秋二季の競馬、夏季の海水浴などに對しては、おびただしき輸送能力を発揮している(『蒲田町史』より)。
★現在の「京急蒲田駅」。

2 夫婦橋周辺

水道が引かれる大正末期まで香川下流の人々は夫婦橋にある堰まで船で飲料水を汲みにきていた。螢が飛び、子供達の楽しい水泳場だった。昭和4年、治水工事の爲、この堰は撤去された。この橋で香川と松葉用水とに分流されていた。



★大正13年から昭和58年まで架けられていたコンクリート製の橋の親柱。

3 日本自動車学校

大正11年、日本初の公認自動車学校として自動車部、航空部の生徒を募集。「将来、如上のサービスステーション(注1)を、我が蒲田に設置せば、東京より約十哩、横濱より約十哩に相当するを以て、ここを中心として自動車の交通がいん脈を極むるに至るであらうと思ふ」(日本自動車学校校長相羽有(あいはたもつ)談・『蒲田郷土史』より)。

4 蒲田電気館

大正13年、蒲田で二番目にできた映画館。定員350名、二階建て。一階は7人がけの木製ベンチ。二階は前方座敷、後方椅子席で下足は取る。日活映画と外国映画を中心に上映。
★現在の京浜蒲田商店街(あすと)西側入り口メガネドラッグ付近。

5 さかさ 逆川と蒲田橋

六郷用水南堀が小林村と安方村の境辺りから分流、鐵道暗渠、撮影所の前を横切り、香川へと合流。通稱「さかさ川」と呼ばれた。「さかさ川橋」は昭和5年、架け替え工事の際に「蒲田橋」と名を変える。



★旧蒲田橋親柱跡が交差点の四ヶ所に残されている。

6 高砂香料

大正9年、甲斐莊楠香により我が国初の合成香料製造会社として高砂香料を創業。松竹キネマ撮影所と隣り合つて中村化学研究所跡地に誕生した。「日本の合成香料発祥の地蒲田で日本の活動寫眞は映画という名前を持つこととなった」と後に城戸四郎(よしかづ)は語る。昭和11年、撮影所が大船に移轉した後は高砂香料がその跡地を譲り受けた。
★創業の地を説明したプレートは、外のアロマガーデンに設置されている。

7 松竹キネマ蒲田撮影所

「板塀に囲まれた松竹王国には、誰でも入ると云ふ譯にはゆかない、表門の左側には守衛の詰所があり、更に其内側には、蒲田に只一つの請願巡査詰所(注2)があつて、表から覗くことすら許されないが、いよいよ撮影が始まると、スターからワンサ(注3)まで、夜も昼もぶつ通しの大車輪で一ト月も二月もついでにゆく(中略)メガホンを持つ監督も、カメラのハンドをまはす撮影技師も汗だくで、トモも活動館なんかで、南京豆や蜜柑を食ひ食ひスクリーンを眺めて居るやうな呑気な譯にはゆかない」(『蒲田町史』より)。
撮影所の近くには俳優・監督など多くの映画関係者が移り住む。人気俳優を一目見ようと撮影所の入口はいつも出待ちの人だかりができていたという。
★JR蒲田駅の発車メロディは、「蒲田行進曲」。

7 大田区民ホール アプリコ

★アプリコ地下一階には、撮影所全景のジオラマがあり、当時表門の前にあった松竹橋は、映画『キネマの天地』の撮影で作られたレプリカが、かつて逆川が流れていた外の広場(フォーマルガーデン)に展示されている。本物の親柱は一階ロビーで見ることが出来る。



8 新潟鐵工所

日本初の船舶用ディーゼルエンジン製造会社。大正10年に鉄骨鉄筋コンクリート建ての工場を建設。



★跡地マシオン敷地内の公園に「日本船用ディーゼル機関発祥之地」記念碑を見ることが出来る。

9 六郷用水

江戸時代、農業用水として水田区(注4)の形状に合わせて形成された水路網だが、耕地整理事業によって宅地化・工場化。のちに生活排水路として姿を変えていった。

10 大倉陶園

大正9年、建屋530坪の陶磁器工場が完成。敷地はチューリップ、ヒヤシンスなどの四季の花に囲まれ、近隣の人からは「花の工場」と呼ばれた。創業者・大藏孫兵衛には西歐に負けぬ陶磁器を作ろうとする固い信念があり、工場自体もそれにふさわしいものに、そして名実ともに陶磁器の花園(大倉陶園)としたのであった。
★志茂田小・中学校および自動車教習所の敷地。

11 黒澤タイプライター工場村

歐米の田園都市思想に着目した創業者・黒澤貞次郎は、働くものは皆家族との考えのもとに、関東大震災後建設された新工場にも、工場のみならず、敷地内に食堂、浴室、購買部を含む建物、車庫、変電所、ポンプ室、材料倉庫、幼稚園、小學校、社宅、農園、池、児童プール、貯水池、給水塔、簡易水道設備などを整備。「吾等が村」という社誌を発行し、人々からは「黒澤村」と呼ばれた。
★現在、富士通ソリューションスクエア付近。

12 省線蒲田驛 西口

大正4年から電化が本格化し、蒲田驛は電車驛となる。2、3両連結の電車が15分おきに運行。当時、驛昇降口(注5)は東口にのみあり、女塚や御園から省線を利用する通勤者が増え、彼らの不満と苦痛が高まった。西側の住民の幾度にも及ぶ陳情のすえ西口停車場の敷地を寄付することで鐵道省はその建設に着手し、大正11年6月に完成した。

13 蒲田常設館

蒲田に初めてできた常設の映画館。大正11年7月開館。男子席、女子席、同伴席に分かれ、この座席区分は全国的に戦時中まで存続。入場料は大人一階席三十錢、二階席五十錢(注6)。小津安二郎も「トーカー」見學に通つたという。
★現在、日本工学院専門学校敷地内。

14 通り抜け地下道

省線蒲田驛に隣接した「あかすの踏切」(注7)とも呼ばれる「女塚踏切」は、一昼夜の開閉が200回を越えるに至つた。踏切が開くまで10分20分要するところはザラであった。
再三陳情を続けた結果、昭和5年にようやく地下横断歩道が開通。

15 東口大通り

東口大通りは「蒲田銀座」(注8)とも呼ばれ、流行りのマーケットやストアが次々と建設された。お洒落でモダンなレストランやカフェなども建ち並び、多くの映画関係者が出入りしたという。また当時東口の近くにあった妙成寺の庚申縁日として、毎週土曜日に多くの夜店が並んだ。撮影所の俳優達もひやかしに訪れ、そこに銀幕のスターを一目見ようと、川崎や大森、遠くは銀座や浅草、新宿からも人が集まり、歩けない程の人混みがあったという。

(注1) 検車場 (注2) 蒲田撮影所所長、後の松竹社長(1894~1977)松竹蒲田調の礎を築く。(注3) 松竹の費用負担で設けられた巡査派出所 (注4) 大部屋俳優 (注5) 改札口 (注6) 当時、大学の初任給が約50円。1円が今の貨幣価値に換算すると約4~6千円。